

# 展示資料目録



最上徳内・近藤重蔵・間宮林蔵

～田沼意次が夢見た蝦夷地と探検者たち～

展示期間：令和7年(2025年)11月1日(土)～令和8年(2026年)1月29日(木)

場所：北方資料展示コーナー

## <凡例>

資料の情報は以下のように記した。

また、資料紹介・人物紹介にある資料の内、目録に資料情報が載っていないものは、資料の情報を掲載した。目録に載っているものは書名以外を省略した。

## 番号 書名

編著者 出版者 出版年月 注記

請求記号 資料番号

表紙の図「蝦夷国全図」（木版 林子平〔著〕 須原屋市兵衛）

天明6年（1786）、仙台の学者、林子平が出版した『三国通覧図説』付図5枚の中の1枚である。「三国」とは、蝦夷地・琉球・朝鮮を指し、さらに無人島（小笠原諸島）について、それぞれの沿革・地理・風土などについて記述した書物で、『海国兵談』（寛政3年出版）と共に、林子平の代表作である。『蝦夷国全図』には「天明五年秋」の刊記があるが、実際は翌6年の出版である。蝦夷地は南北に細長く、現在の地形には程遠いものであり、カラフト島は大陸に地続きの半島とし、その北には「サガリイン」という島が描写されている。すなわちカラフトが二つ描かれたのである。当時、カラフト島は離島か半島かの論議があった。『三国通覧図説』、『海国兵談』共に後になって松平定信から「奇怪異説」を述べ「地理相違」の図を出版したとして絶版を命じられたが、写本また写図として現在も数多く残っている。本館にも写図は5点所蔵される。

<解説：高木 崇世芝 氏>

出典：北方資料デジタルライブラリー 「蝦夷国全図」説明

# 1 プロローグ

## 1 赤蝦夷風説考 北海道開拓秘史

工藤平助原著 井上隆明訳 教育社 1979.9 参考文献：p294 (教育社新書)  
210.088/A 資料番号:1111995963

## 2 蝦夷地一件

[北海道] [1969] 「新北海道史」第7巻史料1の抜粋製本  
210.088/E 資料番号:1108741370

## 3 北門叢書 第1冊

大友喜作編・解説・校訂 国書刊行会 1972 北光書房昭和18-19年刊の複製  
内容：赤蝦夷風説考(工藤平助) 蝦夷拾遺(佐藤玄六郎) 蝦夷草紙(最上徳内)  
210.088/HO/1 資料番号:1112577133

## 4 東遊記

平秩東作著 市立函館図書館編 函書裡会 1981.3 限定100部  
(市立函館図書館蔵郷土資料複製叢書 29)  
210.088/TO 資料番号:1101912051

## 5 天明蝦夷探検始末記 田沼意次と悲運の探検家たち

照井 壮助著 影書房 2001.10 八重岳書房 1974年刊の再刊  
天明の蝦夷地探検関係年表：p342～362  
210.44/TE 資料番号:1106548595

## 6 日本差別史関係資料集成 9 原文篇

科学書院 2016.7 別冊付録：解説篇・解説篇・索引篇 (250,53p 26cm)  
(世界・日本歴史資料集成 第1期・第9巻)  
7.2/NI 資料番号:1112047194

## 7 江戸の戯作絵本 2

小池正胤, 宇田敏彦編 筑摩書房 2024.2 (ちくま学芸文庫 コ10-23)  
F/KO 資料番号:1113221830

### 資料紹介：悦胤蝦夷押領（よろこんぶひいきのえぞおし）

恋川春町作 北尾政美画 天明8年(1788)刊 蔦屋重三郎版元 黄表紙

源義経が奥州平泉で死なず、蝦夷へ逃れたという設定の物語。義経は司馬ダンカンという道案内をたて、奥蝦夷を攻めに向かう。そして当地の女王の娘婿に収まると、蝦夷人をだまして昆布などをせしめ、江戸に戻って大儲けするというストーリー。

田沼政権と北方密貿易を題材としながら、田沼意次のもとで賄賂が横行していることを揶揄した。義経が田沼意次、義経家臣が土山宗次郎や平秩東作、司馬ダンカンが松前道廣、奥蝦夷の女王はロシア皇帝・エカチェリーナ2世(在位1762～96)と見立てられている。一方でダンカンが田沼意次とする見方もある。

展示では『江戸の戯作絵本 2』所収を使用

### 資料紹介：蝦夷拾遺

天明5年(1785)・6年田沼意次の許しを得て幕府勘定奉行松本秀持の命により蝦夷地を探検した幕府普請役佐藤玄六郎・山口鉄五郎・青嶋俊蔵・庵原弥六・皆川沖右衛門ら5名がその結果を田沼の失脚後まとめた北辺の地誌。執筆者は佐藤玄六郎であるといわれている。元・享・利・貞の4巻に地理大概・人物・雑説・蝦夷語に分けて蝦夷地の実情を記し、赤人並び山丹人説を別巻として辺境の様子を明らかにした。

探検は東蝦夷班と西蝦夷班に分けられ、最上徳内は東蝦夷に向かいクナシリに渡った。西蝦夷班は宗谷へ向かい、樺太に渡った。

翻刻活字版：『北門叢書 第1冊』

### 資料紹介：蝦夷地一件

天明5年(1785)・6年に幕府が蝦夷地に派遣した調査団の記録。

本書第一冊には工藤平助の『赤蝦夷風説考』二巻と4年江戸出帆以前の計画書類などを収め、第二冊には5年・6年の現地と幕府の勘定奉行との往復書類、第三冊には6年中の現地からの報告書類、第四冊には7年、事業中止後の御用船・交易品などに関する清算記録を多数収録し、第五冊には寛政元年(1789)のクナシリ・メナシの戦いの記録を収めている。

伝本は内閣文庫所蔵の写本のみで、ほぼ寛政ごろの書写と認められている。『新北海道史 第7巻』で初めて翻刻された。

複製：『日本差別史関係資料集成 9 原文篇』

翻刻活字版：『日本差別史関係資料集成 9 原文篇 別冊付録（『解説篇・解説篇・索引篇』）』

『新北海道史 第7巻 史料1』（北海道編 北海道 1969）

### 資料紹介：東遊記

著者の平秩東作（へづつ とうさく）は、江戸時代後期の戯作者、狂歌師、漢詩人、文人。平賀源内が獄死したのち、罪人である遺体の引き取り手のなかった中、公儀に目をつけられるのを覚悟の上で東作が引き取ったとされる。

天明3(1784)から4年にかけて松前と江差に滞在し、『東遊記』を著した。田沼時代の勘定組頭土山宗次郎に示したものであるという。

天明6年(1786)、横領罪で失脚した勘定組頭の土山宗次郎が逃亡潜伏した際、所沢の山口観音に匿ったことが発覚し、「急度叱」の咎めを受けた。これがきっかけとなり、狂歌界とも疎遠になった。

『東遊記』は松前、江差に滞在し見聞したところを記したもので、アイヌの人びとの風俗や蝦夷地の風土や物産など詳細に書かれている。

複製：『東遊記』（市立函館図書館蔵郷土資料複製叢書 29）

活字翻刻版：『北門叢書 第2冊』（大友喜作編・解説・校訂 国書刊行会 1972）

『日本庶民生活史料集成 第4巻』（三一書房 1969）

## 2 最上徳内 (1755-1836)

天明5年(1785)幕府の蝦夷地調査隊一行に竿取として加わり、同年より翌年にかけて東蝦夷地を調査、ついでクナシリ島・エトロフ島・ウルップ島に渡りロシア人の動向を探った。寛政元年(1789)に起きたクナシリ・メナシの戦いの事件調査のため青島俊蔵と共に松前に渡ったが青島が投獄されたため、連座で投獄された。その後無罪となり、昇進。同3年クナシリ島・エトロフ島・ウルップ島を再度調査し、翌4年にはカラフト調査を命ぜられ西海岸クシュンナイまで至り、山丹貿易の実態を把握した。その後同10年近藤重蔵と共にクナシリ島・エトロフ島に渡ったが、この時重蔵らと「大日本恵土呂府」の標木をたてた。

文政9年(1826)シーボルトが江戸に来た時、その求めに応じて自分の蝦夷地測量図を貸し、アイヌ語辞典の編纂を援助した。

### 8 蝦夷草紙

最上徳内著 1808 写 和

210.088/E 資料番号:1101907549

※北方資料デジタルライブラリーより印刷したものを使用

### 9 蝦夷草紙

最上徳内著 吉田常吉編 時事通信社 1965 内容：蝦夷草紙(最上徳内自写本の複製) 蝦夷草紙後篇(大友喜作「北門叢書」本の複製) 解説(吉田常吉) (時事新書)

210.088/E 資料番号:1111996169

### 10 渡島筆記 文化5年

[最上徳内著] 和 写

210.088/W 資料番号:1101912895

※北方資料デジタルライブラリーより印刷したものを使用

### 11 最上徳内の遺徳を偲ぶ 150年祭記念誌

最上徳内150年祭実行委員会編集 最上徳内150年祭実行委員会 1987.2

289/MO 資料番号:1109841674

### 12 最上徳内

島谷良吉著 吉川弘文館 1977.8 叢書の編集：日本歴史学会 略年譜：p.271～297

主要参考文献：p.306～309 (人物叢書)

289/MO 資料番号:1101833232

### 13 夷酋列像 蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界

北海道博物館編集 「夷酋列像」展実行委員会 2015.9

ア.7/I 資料番号:1112041114

### 資料紹介：蝦夷草紙

天明5年(1785)・6年の幕府の蝦夷地調査団に従い、最上徳内が見聞した所を書き綴ったもの。松前・蝦夷地とそれに続く奥地の風土を克明に描いて、当時の北辺を語っている。調査が終わると直ちに執筆したらしいが寛政2年(1790)本田利明が加筆して『蝦夷国風俗人情之沙汰』と題して老中松平定信に献じた。『蝦夷草紙』にはその後さらに加筆訂正されたものがある。また、「松前風土記」と題された写本もある。徳内はその後蝦夷地行役中に見聞したロシア人、山丹と称する満州人ならびに蝦夷地に往来する日本人のことを各一卷にし、寛政12年に『蝦夷草紙後編』としてまとめている。

活字翻刻本：『蝦夷草紙』（時事新書）、『北門叢書 第1冊』、

『北門叢書 第3冊』（大友喜作編・解説・校訂 国書刊行会 1972）

### 資料紹介：渡島筆記（わたりしまひっき）

最上徳内による自身の知識の集大成ともいえる著作。アイヌの風俗、習慣、遊戯、奇譚などを詳細に書かれており、正確な理解と偏見のない見方が貫かれている。

本書中にはアイヌ通詞上原熊次郎が訳したユーカラ二編の大意がのせられており、ユーカラの最初の翻訳であるという。

アイヌ研究を開いた重要な文献だが、金田一京介博士によって確証されるまではその著作さえも明らかにならず、写本も多く伝わらなかった。

活字翻刻本：『日本庶民生活史料集成 第4巻』（三一書房 1969）

### 3 近藤重蔵 (1771-1829)

寛政10年(1798)松前蝦夷御用取扱を命ぜられ、以後寛政11年・享和元年(1801)・同2年・文化4年(1807)の4回にわたって蝦夷地に赴き、樺太から千島列島の情勢を探索した。

択捉島の一角カムイワッカオイに露人のたてた十字架を撤去して「大日本恵土呂府」の標木をたてた。また、ヒロウ山道の開削、義経神社の創建、クナシリ水道の航路開拓、エトロフ島の開発、千島列島図、蝦夷地図の作成などを行った。

文化5年(1808)書物奉行に転じる。

#### 14 近藤正斎全集 第1

近藤 正斎[著] 国書刊行会編輯 第一書房 1976 明治38年刊の復刻

081.5/KO/1 資料番号:1102132808

#### 15 東蝦夷地エトロフ島之書(山田鯉兵衛著)・惣蝦夷地要害心得書(近藤重蔵著)・答問十策抄(亀井道載著)

山田鯉兵衛, 近藤 重蔵著 松浦武四郎写 和

210.088/HI 資料番号:1102235965

※北方資料デジタルライブラリーより印刷したものを使用

#### 16 北海道史 附録

北海道庁編 北海道 1918

210.1/HO/F 資料番号:1101868261

#### 17 近藤重蔵遺品展

高島町歴史民俗資料館, 近藤重蔵顕彰会編集 高島町歴史民俗資料館 1997.6

奥付の書名:「近藤重蔵遺品展」しおり

P289/KO 資料番号:1111327449

#### 18 近藤重蔵 北方探検の先駆者

裳華書房 1981 《重蔵翁略歴》 重蔵の探検ルート

P289/KO 資料番号:1106539644

#### 19 広尾観光案内

広尾村自治会 [1939] 裏面:広尾観光案内図 「近藤重蔵氏東蝦道路開鑿記碑文訓読」あり

P291.318/HI 資料番号:1109979854

#### 20 北海道広尾港 [静止画資料]

十勝神社社務所 [出版年不明] 白黒 ケース入り 6.近藤重蔵の碑文

IV/318/3 資料番号:1300386685

#### 21 義経神社お絵はがき [静止画資料]

富士元 [出版年不明] 白黒

IV/612/1 資料番号:1300130893

## 22 蝦夷地図式 [地図資料] 坤

近藤 重蔵[著] [出版者不明] 1800 写 チュプカ諸島の図に同じ  
チ/3/22 資料番号:1300111836

※北方資料デジタルライブラリーより印刷したものを使用

### 資料紹介：東蝦新道記（とうかしんどうき）彫字板

国後・択捉島調査の帰途、近藤重蔵は厚岸を経て広尾まで来て、従者・通詞、アイヌの人々68人とともに、ルベシベツ(現広尾町字音調津)からビタヌンケ(十勝・日高の境界)に至る3里(11.8キロメートル)の山道を、独断・私費を投じて切り開いた。これが、蝦夷地の道路開削の嚆矢といわれている。

この道路工事の顛末については、従者の1人、水戸藩士で漢学者の木村謙次(改名して下野源助)が、漢文で板に彫り刀勝明神社(十勝神社)に奉納した。

現存する工事顛末を刻文板『東蝦新道記』は、後の万延元年(1860年)、元の板が朽ち、読みにくくなったため箱館奉行鈴木重尚(茶溪)が再書し、戌土橋正豊・西正友らがサクラの板に再刻したもの。

十勝神社の社宝として保存されている。(北海道指定文化財)

### 資料紹介：惣蝦夷地要害心得書

「惣蝦夷地御要害之儀ニ付心得候趣申上候書付」や「総蝦夷地御要害之儀に付心得候趣申上候書付」とも記される。

文化4年(1807)西蝦夷地沿岸と天塩川、石狩川周辺の内陸部調査後、近藤重蔵が將軍徳川家齊に単独謁見し、蝦夷地の開拓の意見として提出した。

展示している資料は、松浦武四郎写『東蝦夷地エトロフ島之書(山田鯉兵衛著)・惣蝦夷地要害心得書(近藤重蔵著)・答問十策抄(亀井道載著)』より。

活字翻刻:「近藤守重事蹟考」(『近藤正齋全集 第1』所収)

現代語訳:『北方領土と三池藩』(岡本種一郎著 時事通信社 1971 時事新書)所収

### 資料紹介：蝦夷地図式

近藤重蔵は幕臣であるが、寛政10年(1798)、幕命によって初めて蝦夷地へ渡海し、エトロフ島の調査を開始した。以後、同島の開拓に従事し、漁場開設、郷村制などを実施した。本図はエトロフ島滞在中の寛政12年、千島の島々を漁獵のため往き来していた千島アイヌに、米粒をもって千島の島々の形状を作らせ、それを紙に写し取り、質問して地名を書き入れて完成させたもので、「チュプカ諸島図」とよばれる図である。「チュプカ」とは千島アイヌ語で「東」を意味するという。単独の千島列島図として最初の図でもある。また(乾)は「蝦夷地図」であり、元は乾・坤で対になっているものである。この図は大型図と小型図の二種があり、本図は小型図である。

<解説:高木 崇世芝 氏>

原寸:48×76cm

出典:北方資料デジタルライブラリー 「蝦夷地図式」の説明

## 4 間宮林蔵 (1775-1875)

寛政 11 年(1799)蝦夷地御取締御用掛松平忠明に随行の村上島之丞に伴われて初めて蝦夷島に渡り、同 12 年蝦夷地御用雇となる。この年蝦夷地実測のため渡島中の伊能忠敬に会い師弟の役を結び測量術を学ぶ。辞職と復帰を経て東蝦夷地及びクナシリ・エトロフの測量に従事した。文化 5 年(1808)幕命により松田伝十郎とともにカラフト島に渡り、二手に分かれてカラフトが離島であることを確かめて帰ったが、林蔵は再度単身カラフトの探検へと向かう。

翌年ノトから大陸に渡り黒竜江下流の満州仮府所在地のデレンに至り、清朝官吏と応接して帰った。この探検により、カラフトが離島であることが再確認されただけでなく、カラフト・大陸間の海峡の様子が明らかにされ、その旨を幕府に復命した。文化 9 年(1812)から文政 4 年(1821)まで蝦夷地の測量に従事した。

シーボルト事件(1828)の後は幕府隠密として長崎に下り、薩摩藩密貿易の探索、石見国浜田の密輸事件摘発などを行った。

### 23 犀川会資料 北海道史資料集

高倉新一郎編 北海道出版企画センター 1982.8

081/SA 資料番号:1102246475

### 24 北門叢書 第 5 冊

大友喜作編・解説・校訂 国書刊行会 1972 北光書房昭和 18-19 年刊の複製

内容：北夷談(松田伝十郎) 北蝦夷図説(間宮林蔵) 東蝦夷夜話(大内余庵)

210.088/HO/5 資料番号:1101909610

### 25 北夷談 樺太探検・北方経営の先駆者松田伝十郎の蝦夷地見聞録

松田伝十郎著 中俣満編訳 新潟日報事業社(製作発売) 2008.4

松田伝十郎関係年譜：p203～208

210.088/HO 資料番号:1109033165

### 26 北蝦夷図説 一名・銅柱余録

間宮倫宗口述 村上貞助編 名著刊行会 1970 播磨屋勝五郎 安政 2 年刊本の複製

210.088/KI 資料番号:1101904512

### 27 東韃地方紀行 他

間宮林蔵述 村上貞助編 平凡社 1988.5 内容：北夷分界余話・東韃地方紀行・窮髮

紀譚 古賀侗庵編。附 カラフト島見分仕候趣申上候付ほか。解説 谷沢尚一著

(東洋文庫 484)

210.088/TO 資料番号:1101911665

### 28 東韃紀行

間宮林蔵原著 大谷恒彦訳 教育社 1981.4

間宮林蔵略年譜・参考文献：p273～289 (教育社新書)

210.088/TO 資料番号:1111995922

### 29 未踏世界の探検者 間宮林蔵

赤羽榮一著 清水書院 2018.7 (新・人と歴史拡大版 28)

289/MA 資料番号:1112312804

### 30 日本北辺の探検と地図の歴史

秋月俊幸著 北海道大学図書刊行会 1999.7 付：蝦夷地沿海実測図(1枚)

文献：巻末 p17～23 北辺探検・地図年表：巻末 p37～40

291.038/NI 資料番号:1106090283

#### 人物紹介：松田伝十郎（1769-1842）

浅見長右衛門の子、幸太郎として生まれたが、天明2年(1782)御小人目付松田伝十郎の養子となり、仁三郎元敬と改名、同年蝦夷地御用掛となる。文化5年(1808)前年に亡くなった養父の後を継ぎ、伝十郎と改名した。同年2月に幕命により間宮林蔵とともに樺太探検をする。この時、立場としては間宮林蔵の上司にあたる。

蝦夷地が松前藩に返還されるまで幕吏として、7回蝦夷地・樺太の勤務のため渡った。

#### 資料紹介：北夷談

松田伝十郎著。寛政11年(1799)に蝦夷地取締御用掛が任命され蝦夷地が幕府の直轄となったことに始まり、文政5年(1822)に松前藩へ返還されることが全7巻に記されている。その内容は伝十郎が24年間にわたって幕吏として自ら蝦夷地に赴任し、実際に見聞したもの。

間宮林蔵との樺太探検は第3回目の渡航であり、第三に記されている。

活字翻刻本：『北門叢書 第5冊』

『日本庶民生活史料集成 第4巻』（三一書房 1969）

現代語訳：『北夷談』（松田伝十郎原作、堺比呂志訳・解説 晃文社 2006.8）

『北夷談』（松田伝十郎著、中俣満編訳 新潟日報事業社（製作発売）  
2008.4）

#### 資料紹介：北蝦夷図説（原本名：北夷分界余話）

幕府の命を受けて文化5(1808)～6年に二度にわたりカラフト島奥地を探検した間宮林蔵が、松前奉行の指示によりその際の見聞を奉行所の調役下役であった友人の村上貞助に口述し、それを村上が編纂したもの。カラフトの島名・地勢・産物、カラフトアイヌの習俗・生業などのほか、それまでほとんど知られていなかった北部地方のオロッコ(ウィルタ)やスメレングル(ギリヤーク=ニブフ)の風俗その他についても詳細に叙述し、「附録」としてスメレングル人たちの満州仮府への朝貢の次第を記す。

『北蝦夷地部』、『北蝦夷地銅柱余録』などの諸本がある。

安政2年(1855)に『北蝦夷図説』の名で刊本(印刷本)になり、それ以来この名称が一般的になった。

探検の内、樺太部分が『北蝦夷図説』で大陸部分が『東韃紀行』。

複製：『北蝦夷図説 一名・銅柱余録』

活字翻刻：『東韃地方紀行 他』（平凡社東洋文庫）、『北門叢書第5冊』他

## 関連年表

天明3年 (1783)	工藤平助「赤蝦夷風説考」を著す。
天明4年 (1784)	前年立松東作(平秩東蒙)江差に来て越年。帰って『東遊記』を著す。
天明5年 (1785)	仙台林子平著「三国通覧図説」の稿成る。
天明6年 (1786)	天明5、6年に亘って調査した幕府普請役山口高品、佐藤信行等「蝦夷拾遺」を著す。一行中の最上徳内、択捉島滞在のロシア人に会い、「魯斎垂紀聞」を残す。
天明8年 (1788)	幕府巡見使藤沢要人等来る。一行中に地理学者古河古松軒あり、「東遊雑記」を著す。菅江真澄松前へ来り寛政4年去る。その間「えみしのさえき」「えぞのてぶり」「ひろめかり」「ちしまのいそ」等の著を残す。
寛政元年 (1789)	国後、目梨の蝦夷蜂起して和人71人を殺し、物を奪う。松前藩藩士新井田孫三郎等を派して鎮定す(新井田孫三郎『寛政蝦夷乱取調日記』『クナシリ島夷騒動届書記』『蝦夷地一件』)。
寛政2年 (1790)	松前藩士蠣崎広年(波響)「夷酋列像」を描き松前広長これが伝を作る。最上徳内「蝦夷草紙」「蝦夷国風俗人情之沙汰」を著す。
寛政3年 (1791)	幕府普請役最上徳内等、厚岸、霧多布で御救交易を試む。「東蝦道中記」の著あり。
寛政4年 (1792)	幕府普請役最上徳内等宗谷、石狩に御救交易を試む。一行中串原正峯『夷諺俗話』を著す。
寛政5年 (1793)	前年、わが国の漂流民を送って根室に来航越年したロシア使節アダム・ラックスマンを松前に引見し、漂流民を受け取り、通商の事は諭して帰国せしむ。常陸の武石民蔵、木村謙次松前に来り状況を見る。その日記を「北行目録」という。幕吏大橋並八郎ロシア船来航の後を巡視す。「奥の松加勢」の著あり。
寛政8年 (1796)	英人プロフトンの指揮する探検船虻田に来り薪水をとる。
寛政9年 (1797)	英人プロフトン再び絵鞆に来る。
寛政10年 (1798)	幕府渡辺久蔵等を蝦夷地に派遣し調査せしむ(武藤勘藏『蝦夷日記』、「蝦夷地巡行記」)。 幕吏近藤重蔵等択捉島に渡る(木村謙次<下野源助>「醉古日札」) 幕吏中村小市郎「松前蝦夷地海辺盛衰之儀奉申上候書付」 幕吏田草川伝次郎小者善助談「蝦夷物語」
寛政11年 (1799)	幕府東蝦夷地仮上地、蝦夷地取締御用掛をおいて直轄する。 谷元旦「蝦夷蓋開日記」 村上島之丞「蝦夷島奇観」 最上徳内「蝦夷草紙後篇」 遠山金四郎景晋「未曾有記(おくの日記)」 堀田仁助「蝦夷地開発記」(鈴木周助「アツケシ出張日記」)

享和元年 (1801)	東蝦夷地永久土地、箱館奉行を置いて治めさせる。 磯谷則吉「蝦夷道中記」 福居芳麿(勝知文)「東夷周覧」 福居芳麿「蝦夷の島ふみ」 中村小市郎・高橋次太夫「唐太島巡視」 中村小市郎「唐太雑記」
文化元年 (1804)	ロシア使節レザノフが通商を求めて長崎に来たが、幕府はこれを拒否し、翌年日本海岸を 通って帰る(「奉使日本紀行」)。 近藤重蔵「辺要分界図考」成る。 蝦夷地に三官寺を建つ(「国泰寺日鑑記」)。 上原熊次郎・阿部長三郎「蝦夷方言藻汐草」刊行。
文化3年 (1806)	遠山金四郎・村垣左太夫「西蝦夷日記」 東寧元楨『東海参譚』
文化4年 (1807)	この年、幕府は松前氏を転封させ、西蝦夷地をも直轄に移し、箱館奉行を松前奉行と し、これを管轄させた。 春、前年秋樺太南海岸にロシア船が来寇し、家を焼き物を奪い番人を虜にして去った事 件が松前にもたらされ、続いて今春同じ船が択捉島を襲撃し、守備兵は敗走した事件が 報ぜられた。幕府は急速兵を派して辺境を守備させ、若年寄堀田正敦等を派してこれを 督せしめた。 羽太正養「休明光記」 田草川伝次郎「西蝦夷地日記」 「北辺紀聞」 伊藤見達「北地日記」 新楽閑叟「北槎小録」 堀田正敦「松前紀行」 館野瑞元「蝦夷紀行」
文化5年 (1808)	幕府奥羽各藩に命じ、蝦夷の守備を嚴重にし、かつ松田伝十郎、間宮林蔵をして樺太の 国境を極めしめる。 松田伝十郎・間宮林蔵「兩人カラフト見分申上書」 「西蝦夷地高島日記」 村上島之丞「東蝦夷地名考」 最上徳内『渡島筆記』
文化6年 (1809)	荒井保恵「東行漫筆」 「東蝦夷地各場所大概書」 間宮林蔵『東韃地方紀行』 高橋景保「北夷考証」
文化8年 (1811)	ロシア士官ゴロワイン千島沿岸を測量しつつ国後島に至り薪水を求め、守備兵士あざむ いてゴロワイン以下七名を捕え、松前に幽囚す(「日本幽囚実記」)。 平田篤胤「千島白浪」
文政5年 (1823)	幕府蝦夷地直轄を止め、松前蝦夷地をあげて松前氏に帰す。 松田伝十郎『北夷談』成る。

出典：「北海道文献年表」『日本庶民生活史料集成 第4巻』(三一書房 1969年刊)

今回の展示と関連する文献および事項を抜粋し、漢数字を算用数字に変換。

北方資料展示

「最上徳内・近藤重蔵・間宮林蔵～田沼意次が夢見た蝦夷地と探検者たち～」目録

発行年：令和 7 年 11 月

編 集：北海道立図書館 北方資料室

発 行：北海道立図書館

〒069-0834 北海道江別市文京台東町 41 番地

TEL：011-386-8521 FAX：011-386-6906